東日本大震災の被災地をゆく

4月1日～4月3日

気仙沼、南三陸町、陸前高田市

グローバルウォータ・ジャパン代表　吉村　和就

被災地の状況

宮城県気仙沼地区

道の両側には瓦礫がうずたかく積まれ、つぶされた自家用車が散乱している。TVやマスコミ報道では知りえないことは、悪臭と砂塵である。約3万トンの水産物が流出したと言われている。津波から2週間、腐敗が進み強烈な臭いを発している。もう一つは砂塵である。泥まみれの瓦礫や道路が乾燥するに従い、風に運ばれた細かい砂塵が体に吹き付けてくる。メガネや顔に付着する。もちろん臭いもひどい。

壊滅的被害の気仙沼終末処理場

最も低い地域にある終末処理場に向かう。処理場の周りは陥没し、内部は徹底的に破壊されている。天井は落ち、制御盤は泥をかぶり、ゲート類はすべて破壊されている。簡単にいうと水槽の上部の突起はすべてはぎとられている。同敷地内にある川口ポンプ場の建屋は津波の勢いだろうか、完全に壁が破壊されている。曝気槽の上から

写真1　気仙沼終末処理場

旧市内は5割方復旧、海岸沿いは苦労している（メイン配管の破断や漏れ）。本吉地区は壊滅状態（浄水場が津波で壊滅）。市全体として被災者への給水はかなり行き渡っている。

気仙沼市の水道復旧状況

災害対策本部の置かれている気仙沼市役所に向かう。市役所の入口通路には、死亡者リスト、行方不明者リストが壁一面に貼られている。（死亡者583人、行方不明者1450人、避難者約1万3千人、3月31日現在）水道関係の対策本部は新月浄水場に設置されている。山側にある新月浄水場（計画給水量2万立方㍍／d、表流水利用）に向かう。気仙沼市ガス水道部工務課長から説明を受ける。市内の水道復旧率は46%位であり、唐桑地区は海岸地域を除きかなり復旧した。気仙沼の

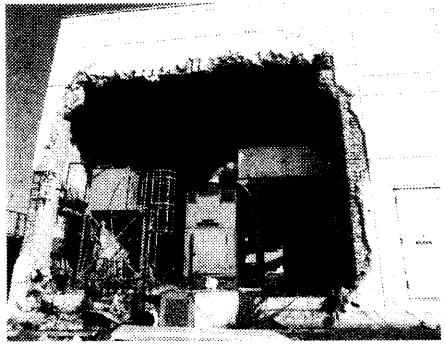

写真2

気仙沼・本吉地区

本吉地区は津谷川の両岸に開けた町であり、瓦礫の中の道を行くと気仙沼市本吉水道事務所の建物が見えた。建造物は健在であったが、内部は壊滅的な状況であった。取

写真4

水施設（化学注入、水取水）は陥没と破壊、電気制御盤は中まで泥が入り建屋内には瓦礫が散乱、屋内設備はほとんど破壊されている。さらに県道を進むと今度は津谷街浄化センターの建物が見えてきた。この津谷街浄化センター（分流式で処理容量は964立方㍍／日、平成14年4月完成）の内部は完全に破壊されていた。両施設（浄水場、下水浄化センター）とも建物外観は残っているが、内部は徹底的に破壊されており、復旧には、かなりの時間がかかることが予想される。（写真3）

南三陸町

海に面した入江の村落はほとんどが流され、土台しか残っていない壊滅状態である。南三陸町の被害（町民約1万8千人のうち、死亡者375人、町民の半数約9千人が行方不明、4月4日時点）に対する災害対策本部は役場が使用できない為に、旭洋設備工業株式会社（本社仙台市若葉区）の南三陸事業所内に設置されており、応援給水が行われていた。入江に通じる水道施設は完全に破壊されたが、下水処理施設は、建設時に海岸地帯の土地が無く、高台に設置したので生き残っている。

気仙沼市大島の復旧状況

気仙沼湾に浮かぶ大島（周囲22㌔、人口3241人、漁業と観光の島、交通は船のみ）に向かう。震災直後から渡島は孤立（船しか交通手段がない）し、しかも火災に襲われた。飲料水の確保については自衛隊や米軍のヘリによりボトルウォーターが確保出来ている。島で一番高い亀山（標高231㍍）の湧水をタンクで運び、大島中学校のプールに蓄え、それを非常用浄水器（大学産業製、予備含む3台）でろ過・殺菌し、避難所に運んでいる。当面20立方㍍／日（一家庭当たり日量20リットル給水目標）を確保し、順次60立方㍍／日と拡大していきたいが、海底配管が復旧しない限り衛生的な環境を保てない。

陸前高田市

気仙沼から北上し陸前高田市に向かう、45号線は寸断されているので、山側から陸前高田市に入る。高台から陸前高田市を望むと声が出ないほど徹底的に破壊され、頑丈な鉄筋コンクリート作りの建物がかろうじて残されているだけで、ほとんどが津波で流されている。今までの被災地は多少とも瓦礫が残っていたが、陸前高田市では、その瓦礫さえも津波がさらっていったような風景である。高台にある学校給食センターに災害対策本部が置かれていた。陸前高田市の被害（1094人死亡、約1300人行方不明、住宅約3600棟が全壊、約1万4千人が避難、4月4日時点）は甚大であり、現在地での復旧は不可能と思われる。（写真4）

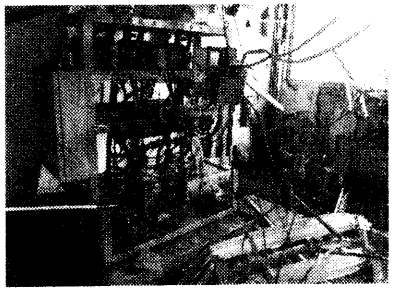

写真3　本吉浄水場